

論文

河内家菊水丸の活動にみる新聞詠み河内音頭 「カーキン音頭」の分析を通して

The Performances of Kikusuimaru Kawachiya as a Leader in Singing and Writing a Text on “Kawachi-Ondo” (a Dance Song): Analysis of “Khakin-Ondo” (TV Commercial Song)

田中 友美

高橋 美樹 (高知大学教育学部・音楽学研究室)

Tomomi TANAKA, Miki TAKAHASHI*

* Laboratory of Musicology, Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan

ABSTRACT

This article explores the development process of “Kawachi-Ondo” (the Bon Dance in the Kawachi area) through the performances of Kikusuimaru Kawachiya. This study especially focused on the meaning of Shinmon-Yomi (the singing and narrating of current topics) through the analysis of “Khakin-Ondo”. Because “Khakin-Ondo” was a hit song in 1991, Kikusuimaru became famous nationally as Kawachi-Ondo singer. “Khakin-Ondo” was not originally written by Kikusuimaru. However, in the rise of the world music boom, the mass media gave “Kawachi-Ondo” attention, and Shinmon-Yomi which Kikusuimaru had revived was recognized as a new genre to the background. In conclusion, Kikusuimaru succeeded in showing the entertainment possibility and musical variety of “Kawachi-Ondo” through the mass media.

はじめに

盆踊りは、日本に古くから伝わる民間行事であり、日常生活に深く根付いている。この盆踊りの中でも、関西の河内地方に伝わる河内音頭は、各地の伝統的な音頭とは少し違った様相を持ち、変化し続けている。変化の要因の1つとして、「新聞詠み」河内音頭を担う河内家菊水丸の活動が関連していると考えられる。菊水丸は、櫓の上で河内音頭を語る以外にも、テレビやラジオなどマスメディア上の活動が多く見られ、河内音頭において非常に特徴的な音頭取りといえる。

本研究の目的は、河内家菊水丸の活動を通して河内音頭の展開プロセスを探り、菊水丸の名を全国区にした「カーキン音頭」の分析から新聞詠みの意味合いを検討することにある。さらに、河内音頭がどのように同時代の流行に支えられ、伝播などの現象が起きたかについても考察を進める。

1. 河内音頭

本章では河内音頭がどのような芸能であるのかを確認する。そのため、発祥地である河内地方を中心とし

た関西における河内音頭、伝播した河内音頭、メディア上で見られる河内音頭、の3つに分けて考察する。

1.1 河内音頭とは何か

河内音頭は、「大阪府八尾市を中心とした河内地方に普及する盆踊り唄」¹⁾である。河内音頭とは本来は口説き形式の盆踊り歌を指すが、河内音頭にのせて踊る踊りの総称としても用いられる。民謡における口説きとは、「長い物語を歌唱するもの」²⁾とされ、七七や七五調で歌われる。河内音頭は、主流である河内音頭のほかにも、正調河内音頭と言われる八尾の流し音頭などが存在し、節回しはさまざまである³⁾。音楽評論家の中村とうようは河内音頭について、「音頭の内容には、語り物の伝統がシッカリ生きている」⁴⁾と述べている。語り物とは、「日本の声楽曲の一系統で、筋のある物語に節をつけて語るもの。また、その詞章」⁵⁾で、浄瑠璃や浪曲である浪花節などがある。中村は、浪曲の要素が大きく加わる比較的最近の河内音頭を「現代河内音頭」、地域ごとに伝わる昔の形態を保持したものを

「伝承河内音頭」と呼んでいる。音頭のネタでも、古くからの「伝承河内音頭」の中で「俊徳丸」や「阿波の鳴門」が語られていたことや、加えて浪曲の影響を強く受けていることに、その影響が見られる⁶⁾。

河内音頭は櫓を立て、その周りを回りながら踊る輪踊り形式で、櫓の上には囃子方・地方・音頭取りなどが立ち、音頭を進行させる。三味線や太鼓のほか、エレキギターなどが音頭とともに演奏される。

次に、河内音頭の歴史について記述する。

河内音頭の起源は、言い伝えられているものが諸説ある。河内音頭の新聞詠み（後述）家元である河内家菊水丸は河内音頭の歴史を800年と主張している。菊水丸は著書で4つの説を紹介しており、以下にその諸説をまとめる⁷⁾。

- (1) 楠木正成の出陣を祝う太鼓と舞、謡いが始まりであるという説。楠木正成は鎌倉-南北朝時代の武将で、河内地方の豪族であった。1331年に後醍醐天皇の呼びかけに応じて挙兵。建武政権下で摂津守、河内守の役につき、後に足利尊氏と摂津湊川でたたかい、敗れて自刃した（「楠木正成」『日本人名大辞典』）。現在でも大楠公として奉られ、当時の武勇伝が語り継がれている。
- (2) 楠木正成の霊を弔い、村人たちが謡い踊ったのが起源であるという説。
- (3) 常光寺のお経を元とする説。この場合は、常光寺で唱えられていたお経が念仏踊りとして広まり、盆踊りとして定着したという過程が考えられる。
- (4) 足利義満による常光寺再建の際に歌われた木挽き歌が起源であるとする説。

河内家菊水丸は、常光寺には現在も原型とされる正調河内音頭が残っていること、木挽き歌が800年を超える長い歴史を持つことなどから、800年と考えられると述べている。しかし、菊水丸自身その発生を決定できる決め手を提示するには至っていない。常光寺の正調河内音頭や、楠木正成が河内音頭に影響を与えた講談でも題材として扱われ歌われていることから、(2)と(3)が関係している可能性があると考ええる。しかし松林⁸⁾が指摘するように、楠木正成の存在したのは鎌倉末期から南北朝時代で、史料に名前が載るのは1331年である。河内音頭がどのような背景・理由で生まれたのかは定かではない。よって、800年前を起源とするとは言えない。

音頭研究家の村井市郎は起源やその理由には触れていないが、交野節が元節であるとし、200年ほどの歴史を提唱している^{9) 10)}。以下にこれをまとめる。

- (5) 元節とされる交野節は、江戸時代の中期から後

期にかけて河内国交野郡（現交野市郡津）に誕生した。一節が七七・七五七五で、河内音頭には出だしの文句や掛け声に交野節が残っている。歌亀が、交野節を基本に改良を加えて歌亀節を流行らせ、江州音頭との区別の必要から河内音頭として名称が一般化したのは明治20年頃であった。また、大正初期に二代歌亀にインスピレーションを受け、初音屋太三丸により平野節が開発された。現在の河内音頭は浪曲の影響を大きく受けており、1946年に初代初音屋源氏丸が平野節に浪曲の調子を乗せたものに近いとされている。1961年にテイチク株式会社（現 株式会社テイチクエンタテインメント）から発売された鉄砲光三郎の『民謡鉄砲節』¹¹⁾が流行した。テンポもやや早まり、昭和40年代以降のエレキギターの普及やワールド・ミュージック・ブームを経て、シンセサイザーなどのさまざまな伴奏楽器のほか、演奏法など新しい要素を取り入れ現代に続いている。

村井の研究は朝倉喬司の論文¹²⁾や、松林茂¹³⁾でも用いられており、定説として扱われている。この説は起源とする交野節からたどり現在の河内音頭まで綿密な検証を重ねた研究結果であると考ええる。本論でも新たな説をあげることはできず、村井による説(5)を参考とした。

1.2 関西の中の河内音頭

現在の河内音頭を支えるものの1つに、さまざまな流派・会派の音頭取りを含めた担い手の存在があげられる。河内音頭における音頭取りは「百派千人」と言われ、これは正確な人数が定かではないが、数多く存在するという意味である。数少ないプロの音頭取りである河内家菊水丸は、本業としているのは十人弱であると述べている¹⁴⁾。大多数の音頭取りはアマチュアで、副業として櫓の上に立っているのだという。会や家などの屋号は音頭取りの名字と言える。『民謡鉄砲節』をヒットさせ、鉄砲節を広めた鉄砲光三郎の門下である鉄砲一若などが現在も鉄砲節河内音頭を伝えている¹⁵⁾。鉄砲節は、ジャズに影響を受けた鉄砲光三郎がギターやピアノ、ベースを取り入れ、太鼓のリズムを工夫して作り上げたものであるという。中村とうようは、鉄砲光三郎を「河内音頭の初めてのプロ・アーティスト」とし、「現代河内音頭の父」として、日本だけでなく外国でも活躍したと述べている¹⁶⁾。

数ある河内音頭の流派・会派のうちの歴史があるものの1つに、戦前に初代三音家浅丸によって創始された三音会がある。戦後には20名ほどの弟子を抱えていた

という¹⁷⁾。現在は創作太鼓に力を入れながら、四代目会長として二代目小浅丸が中心となり活動している。顧問兼作詞家があり、家元・会長・副会長・会計以下15名の会員という組織構成となっている。

また、遅めのテンポとマイナーコードを使用したヤンレー節を取り入れたヤンレー節河内音頭を扱うのが鳴門家である^{18) 19)}。代表は鳴門家寿美若であり、年代は幅広く、公開されている写真からはおそらく小学生と考えられる少女も見られる。鳴門会も三音会も、メンバーは随時ホームページ上で募集されている。

民謡の世界では、流派・会派の持つ力は大きい。師匠と弟子のつながりは深く、民謡界が閉鎖的とされる理由の1つでもあろう。しかし、河内音頭においては流派・会派を新しく興すことは自由である。加えて、たった1人で名乗ることも可能である。名は受け継がれる場合もあれば、そうでない場合もある。その際血縁が必ずしも必要と言うわけではなく、子、孫と次世代が受け継ぐ場合もあれば、全く血縁関係のない人物が受け継ぐこともある。これらのことから、河内音頭の組織構造は、中央集権的な家元制度とは異なる、それぞれ自由な会派の共生と言える。用いる節やテンポ、楽器などで、独自性を追求し差別化が見られる。

1.3 メディア上の河内音頭

今日に至るまで、メディアとの関わりなしに現在の河内音頭はなかったと考えられる。河内音頭の発展には、浪曲の存在は欠かせない。浪曲は、浪花節と同一のものを指す。浪花節は「語り物の一種。江戸末期、説経節・祭文などの影響を受けて大坂で成立。初めは、ちょんがれ節・うかれ節などともよばれた。三味線の伴奏で独演し、題材は軍談・講釈・物語など、義理人情をテーマとしたものが多い」²⁰⁾と定義されている。

浪曲はレコードも多数発売され、盛んに民衆の娯楽として親しまれていた。そのなかでも浪曲音頭が存在し、河内音頭の節で歌われることがあった。戦前、日本各地の民謡のレコードが出されているが、河内音頭というジャンルでは見つけることはできない。しかし、浪曲、もしくは浪曲音頭という括りで河内音頭が取り入れられていた可能性が考えられる。民謡として捉えられなかった理由として、戦前の河内音頭では「乃木将軍」などが盛んに歌われており、歌としてではなく語り物の一種として捉えられていたことが挙げられる。

『民謡鉄砲節』の鉄砲光三郎は発売2年後の1963年、東京の参天製菓のCMに鉄砲節とともに出演している²¹⁾。鉄砲光三郎本人が出演し、鉄砲節河内音頭にのせて目薬を紹介するという内容であった。1963年は、白黒テレビが急速に一般民衆へ普及し始めた時期と重なる。

遠くはなれた河内と東京ではあるが、このときインパクトを受けた世代が中心となって、現在東京における河内音頭を推進している。前述の松林がそうであり、松林の所属する全関東河内音頭振興隊には、朝倉や藤田正らが名を連ねる。

『民謡鉄砲節』が発売されたのは、現在演歌や歌謡曲の歌手が多数在籍しているテイチクからであった。テイチクからは他にも河内音頭のレコードが発売されているが、河内家菊水丸は河内音頭の発展にローオン・レコードの存在を指摘している²²⁾。浪曲と音頭を扱うレコード会社であり、「ローオンこそ河内音頭のためにあった」²³⁾と述べている。前述したように、河内音頭と浪曲は関わりが深く、現在でも浪曲家による河内音頭が見られる。

ローオン・レコードとは、大阪市天王寺区に1971年から約15年間存在したレコード制作レーベルである²⁴⁾。ローオンとは浪曲音頭の略で、浪曲再生を掲げ、約500点のレコードを出していたという。1951年に民間のラジオ放送が始まった当初は浪曲番組が盛んに放送され、民謡浪曲や歌謡浪曲が生まれた²⁵⁾。河内音頭が浪曲を積極的に取り入れた時期であり、浪曲師による音頭も見られる。代表的な浪曲師に、京山幸枝若があげられる。ローオンからも浪曲河内音頭として「会津の子鉄」や、新聞読みものスタンダードである「河内十人斬り」などのレコードを多数発表している。河内家菊水丸の記述²⁶⁾によると、京山幸枝若は1972年にローオンへ移籍している。1953年にテレビ放送が始まり、ラジオからテレビへ、大衆とメディアのかかわりが変化した。その中で、次第に浪曲の人気は衰えていった。安斎竹夫はその衰退の原因を、視覚的に動きのない浪曲は目が主体のテレビに適さなかったからとしている²⁷⁾。メジャー・レーベルであるテイチクに所属していた京山幸枝若がローオンに移籍したことから、浪曲の衰えを見ることができる。レコードやラジオ、テレビなどの戦後マスメディアの隆盛と河内音頭の発展は密接に結びついている。鉄砲光三郎や京山幸枝若は、マスメディアを介して活動したパイオニア的存在であり、菊水丸はそれに続く者として位置づけられる。

1.4 伝播した河内音頭

盆踊りをはじめとする祭りには、全国的な伝播が見られるものがある。例えば阿波踊り、高知のよさこい祭りを発祥とする札幌 YOSAKOI ソーラン祭りなどが挙げられる。河内音頭も例外ではなく、伝播したものとして、東京都墨田区錦糸町における錦糸町盆踊りがある。本項では河内地方から錦糸町への伝播の経緯を整理し、錦糸町でどのように河内音頭が受け入れられ、

踊られているのかを考察する。

河内地方だけで踊られていた河内音頭が全国区として広まった背景には、ルポライター朝倉喬司の存在が大きい。その中でも、1970年代以降の錦糸町への河内音頭の伝播について記述する。

朝倉喬司が河内音頭を知ったのは、1978年であるとしている²⁸⁾。そして、音楽雑誌『ニューミュージック・マガジン(現 ミュージック・マガジン)』1978年10月号に、朝倉執筆の論考「大阪の闇を揺さぶる河内音頭のリズム」が写真入り10ページに亘って掲載される²⁹⁾。この論考をきっかけに、河内音頭の研究ため、翌1979年夏に朝倉を中心とした人々によって「東京河内音頭振興隊」(現在は『全関東河内音頭新興隊』)が結成された。その後も度々河内音頭は『ニューミュージック・マガジン』誌上で取り上げられ、1982年7月20-21日には東京渋谷のライブハウス・ライヴインで「第1回河内音頭 東京殴りこみコンサート」が催された。そして、その翌日初めて錦糸町で公演している。この時の集客は400人前後であったとされている³⁰⁾。1983年の「第2回河内音頭東京殴り込みコンサート」では、後の上々颱風が当時は紅龍&ひまわりシスターズとして出演していた。1988年には江州音頭の桜川唯丸の参加も見られ、河内音頭のみには拘るのではなく、幅広くダンスミュージックとしての音頭を楽しもうという意図があったと思われる。また、1991年には河内家菊水丸の「カーキン音頭」が大ヒットしたことも、東京における河内音頭の広まりに大きな影響を与えたであろう。菊水丸は1993年の第12回まで出演していた記録があるが、以後の出演記録を確認することができない。菊水丸の出演が見られた1990年代初頭から現在にかけては2~3万人の集客がみられる。1985年「錦糸町大盆踊り85'河内音頭東京初櫓」として、初めて櫓を立てて盆踊りの形式で行われ、2007年には第27回を迎えた。

次に、なぜ一地方の盆踊りである河内音頭が遠く離れた東京の錦糸町で何年にも亘って踊られ、根付くに至ったのか。当時の風潮や社会背景をふまえ、その要因を考察する。

1970年代初頭、国鉄による「ディスカバージャパン」というキャンペーンが行われた。「ディスカバージャパン」は大阪万博後の個人旅行拡大を狙ったものであるが、このキャンペーンを手がけた藤岡和賀夫は、このコンセプトが「自分自身の発見」³¹⁾であったと述べている。広告では地方の日常や古都京都の仏閣などを舞台とし、現在の場所から一歩ひいて、落ち着いて自分自身を見つめ直せる場所が取り上げられたと推察する。藤岡は高度経済成長期を経て物質・経済的に豊かになったが、公害をはじめとする社会的歪みや、横並び状

況に対する反省や飽き足らなさをもたらしたとし、「ディスカバージャパン」は、「日常性を断ち切って自分自身を見つめ直す」³²⁾ための旅であった。そして1978年から1980年代初頭まで、「ディスカバージャパン」に続いて「いい日旅立ち」というキャンペーンが行われた。「いい日旅立ち」は、「ディスカバージャパン」のあとの世代で「八無主義」³³⁾といわれた若者に対し、「陽だまりから抜け出して、もう一度自分を発見する旅」³⁴⁾をコンセプトに掲げられた。

「ディスカバージャパン」「いい日旅立ち」両者ともに自己の再発見を掲げているが、その「場」として注目されるのは都市部ではなく地方であった。新幹線という大量旅客移動手段の発展とともに、個人の目が都市から地方に向けた時代といえる。そこで出会う地方の文化・社会は新鮮で、当時の現代人の興味を引くものであったに違いない。旅行者は地方の文化の中で、自分の新たな興味を発見したと考えられる。そして旅行者だけでなく、社会の流れとして地方に注目が集まった時期だと思われる。

また、1979年に福島県に始まり、そののち全国へと広まった「一村一品運動」がある。その土地のものを再発見・再評価する試みで、「各市町村ごとに何かひとつ誇れるものをつくろう」³⁵⁾と、地方起こしとしてはじめられた。この運動を企画した当時の大分県知事・平松守彦について分析した森彰英は、一村一品運動を「ローカルにしてグローバル」とし、「地域の特色を出せば出すほど、それが国際的に評価される。…中略…ローカル性豊かなものが世界に通じる」³⁶⁾と述べている。

錦糸町の河内音頭は、河内地方が意図して発信したものではない。しかし、「ディスカバージャパン」「いい日旅立ち」「一村一品運動」などの運動も相俟って、地方の文化や芸能が評価されたのは事実であろう。

錦糸町で行われる河内音頭では1985年から櫓が立てられ、音頭取りは毎年河内地方から招かれる。これらの動きには、本場の河内音頭に対する尊敬と敬意がうかがえる。しかし、河内音頭の形式をすべて模倣しているわけではなく、「錦糸町マンボ」という錦糸町で新たに創作し、踊られるようになった振り付けなどに独自の工夫が見られる。河内音頭を継承しながらも、年を重ね地域に根付くうちに、本来のものと創作とが混ざり合い、独自の河内音頭となっている。錦糸町における河内音頭は、本場から伝播した後に本来の形式と独自のスタイルを融合し、自立への道を創造している動きが特徴的である。しかし、その創造された河内音頭は地域へ伝播したものであると受け止め、本場に敬意を示す姿勢が、今日みられる祭りの活性化の根底にあると言える。

2. 河内家菊水丸の活動

本章では、河内家菊水丸の活動に焦点を当てる。お盆時期の櫓の上だけでなく、リクルートのテレビCM「カーキン音頭」で脚光を浴び、その後もCDやテレビ・新聞などのマスメディア上で活動する河内家菊水丸について考察する。

2.1 主な経歴

河内家菊水丸の経歴について「修行期」「露出期」「安定期」の3つに分類し、記述する。

2.1.1 修行期

河内家菊水丸は1963年に、父は14代目河内家菊水、母はピアノ講師という環境の下に生まれる。小学校低学年の頃より父に弟子入りし、小学校5年生の時には初櫓を経験し、河内家きよしとして活動していた。中学校3年生の時に民謡河内音頭久乃家会に預かり弟子として入門し、久乃家菊若として、吉本興業に所属するまでの3年間を久乃家会で過ごす。

高校卒業後の進路を河内音頭のプロとして活動することを志し、高校3年生の夏に吉本興業へ入社して、その秋には初舞台を踏む。菊水丸は自身の著書で当時について、「大阪の超マイナーな芸能である河内音頭を職に選んだ私は、せめて所属の事務所だけでも有名な所がいい」³⁷⁾と述べている。この背景として、1960年代の河内音頭のヒットから長い年月が過ぎ、関西の中でも河内音頭の知名度がさほど高くなかったことが挙げられる。しかし、菊水丸の発言から、当時すでに将来的な活動のフィールドを全国だと認識していたことが推測できる。河内地方の音頭取りとしての活動だけでなく、プロとして今後幅広く活動することを想定しての選択であったのではないと思われる。

当時古典ネタを扱っていた菊水丸は17歳の初舞台で、「MANZAIブーム」に沸く観客とのギャップを感じたと述べている。「MANZAIブーム」とは、1980年頃から起きた、テレビの普及を背景とした漫才の大流行を指す³⁸⁾。それまで経験してきた盆踊りと観客が目的とするものが違うことが理由の1つとして挙げられるが、この時、幅広く活動するために多くの人の心をつかむ必要性を感じたのではないかと。菊水丸は著書の中で「時代と完全にズレて」おり、（河内音頭を）「改革」する必要性を感じたと振り返っている³⁹⁾。この時感じた観客と自分との違和感が、時代に対する考え方や後の活動スタイルにも大きな影響を与えたと考えられる。

初舞台の後に「改革」の必要性を感じた菊水丸は、その方法を探るべく、徹底的に河内音頭に関する文献を調べたと述べている。そして、その中で「新聞詠み」

を知るに至った。そして、「なんや、河内音頭とは、本来新しいものやったんや」⁴⁰⁾と思ったという。以降、これきっかけとしてさまざまな試みに挑戦することとなる。新聞詠みを知った1981年秋から、それが菊水丸のスタイルとしてはっきりした形となり、カセット『河内タイフーン』を発表する1984年までは、表立った活動が記述としてあまり残っていない。後の著書で菊水丸は、1983年に東京と大阪で短期間テレビに出演していたことに触れ、「『有名になりたい!』『早く売りたい!』だけで渡っていきける甘い世界ではないことを思い知った」と、述べている⁴¹⁾。露出を控えていた理由は、実力を付けるため、「テレビへの再びのチャレンジは、しばらく棚上げにした」という発言にみることができる。そして新聞詠みと古典ネタに力を入れることにし、浪曲や講談の速記本、ネタのヒントとなる時代小説の掘り起こしをしていたという⁴²⁾。この期間は、他のジャンルの調子や楽器を取り入れるなどの様々な試みの中で音楽的な面で新しいスタイルを模索していた。また、語りの内容やその方法としては、昔の史料に徹底的に学び、後の新聞詠み河内音頭につながる「改革」された河内音頭を完成させるための、新たな修行期の3年間だったのではないだろうか。

1984年には、レゲエ河内音頭「ボブ・マーリー物語」を制作する（カセット『河内タイフーン』所収）。それまでレゲエの他にもロックを取り入れたり、ドラムやギターの使用など、「新しいもの」としての河内音頭の可能性を追求してきた。カセットの発売はその輪郭が見えてきたと感じた結果であったのではないだろうか。同時に、1980年代は世界的なワールド・ミュージック・ブームにあたる。ワールド・ミュージック・ブームでは、世界中のそれまであまり知られていなかった様々な音楽に注目が集まり、それらの音楽に最新のテクノロジーを加えることで、従来とはまた違った新しい音楽を作り出す試みがなされていた。日本でも少数派の音楽であった沖縄やそれ以南の伝統的な島唄などが取り上げられた。日本古来の伝統音楽にまつわる例としては、1980年代半ば、宇崎竜童率いる竜童組が祭文や浄瑠璃、浪曲、音頭など、伝統音楽の中でも語り物を取り入れた楽曲を制作し、コンサートを開催していたことが挙げられる。その中では、河内音頭の囃子を取り入れるという試みも行われたようである⁴³⁾。

カセット『河内タイフーン』に収録されている「グリコ事件 終結宣言音頭」は、菊水丸の新聞詠み河内音頭の第1作目として発表された。これは1986年に起きたグリコ・森永事件をテーマに取り扱ったもので、かい人21面相を名乗る犯人が新聞社などに送りつけた手紙をそのまま河内音頭として詠んだものである。新

聞詠みと菊水丸のスタイルが融合し、新たな新聞詠み河内音頭として復活をみたと同時に、菊水丸の今後の活動の新たな契機となった音頭である。

1985年11月、藤田正は『ミュージック・マガジン』誌上で「河内家菊水丸 - 頭角を現す音頭界のニュー・ヒーロー」⁴⁴⁾という記事を発表した。この記事では、レゲエを基本リズムとし、ギター、ベース、ドラム、パーカッション、太鼓で構成されたバンドである河内家菊水丸&カワチ・エスノ・リズム・オールスターズのライブについて感想を述べている。この時に演奏した「ボブ・マーリー物語」「グリコ事件終結宣言」所収のカセット『河内タイフーン』が発売された時、平岡正明は『ミュージック・マガジン』1984年2月号誌上で「面白がられるのは一度だけ」と評していたが、11月号では「目の離せない存在」⁴⁵⁾として好意的な評価へと変化し、成長を認めている。

1986年、菊水丸はカセット『河内音頭・新聞詠み』を発表する。この中で詠まれている「昭和太公・田中角栄物語～序の巻 少年時代」の発案は、朝倉喬司とフリーライターの伊達政保であったと菊水丸は述べている⁴⁶⁾。朝倉は自らの感性で河内音頭に注目するとともに、菊水丸に助言・史料を提供するなどプロデューサー的な役割も果たしたと考えられる。朝倉は、菊水丸が「大リクルート事件 江副浩正半生記」として大リクルート事件を取り上げた1988年の5月、論文「河内音頭」⁴⁷⁾を発表している。このリクルート事件がその後の菊水丸のCMやテレビなどメディア露出の直接のきっかけであり、菊水丸自身もリクルート「シリーズ」に取り組んでいなかったら、陽の当たらない河内音頭、そして当然菊水丸にも平成の御世、スポットは当たらなかった」と述べている。この音頭はテレビでも取り上げられ、カセット『大リクルート事件・傑作集』⁴⁸⁾のヒットにつながる。そしてアメリカやイギリスでも紹介されるに至った。

1980年代のワールド・ミュージック・ブーム、その前から次第に河内地方のみならず東京でも河内音頭に視線が集まっていたことが、菊水丸の活動を後押ししたと思われる。そして、菊水丸が時代の潮流に乗り、流れを自らに引き寄せるべく上手くコントロールした結果といえる。

2.1.2 露出期

菊水丸が一躍有名になったきっかけが、リクルートのCMに用いられた「カーキン音頭～フリーター一代男～」である。1991年1月下旬から1992年3月下旬まで放送された。当初東京限定の予定であったが反響が大きく、CD化に続きテレビ出演したことが、菊水丸の知

名度を全国区にした。

また、1990年には初めての世界的な活動であるイラクでの「平和の祭典」に参加し、同年末にはソ連の赤の広場での公演も催している。平和の祭典は、湾岸戦争が始まる1ヶ月前である1990年の12月に、アントニオ猪木の呼びかけによって行われた。「ワールド・ピース・フェスティバル・フロム・イラク」という正式名称で、日本とイラクの民謡歌手やバンドによるコンサートのほか、スポーツイベントも催された⁴⁹⁾。その後も、1992年に北方四島色丹島、1994年には韓国板門店を訪問し、各地で音頭を取っている。イラクへは、主催者であるアントニオ猪木からの誘いで同行したとあり⁵⁰⁾、自発的な行動ではないと思われる。よって、菊水丸が自ら世界平和を大きく掲げ世界的な活動を始めたとは考えにくい、イラクでの公演をきっかけに、その後世界へ目を向けるようになったと思われる。イラク滞在中、ホテルのベッドの中で盗聴される恐れがある中、ひとりで河内音頭を録音していたことが、当時のマネージャー竹中功によって記されている⁵¹⁾。その後、菊水丸は新聞詠みとして「イラク侵攻ドキュメント」などを収録したCDを発表している⁵²⁾。新聞詠みのネタを追い求めていくことと、新聞詠みというスタイルで発表することで、より世間に知らしめることができる2つのベクトルが寄り添い、社会的な意味をもち始めたと言える。

この平和の祭典には、アレンジャーとして佐原一哉が同行している。佐原は菊水丸だけでなく、江州音頭の桜川唯丸や沖縄のネーネーズなど、音頭や民謡のサウンド・プロデューサーとして活躍している。佐原による菊水丸の音頭のプロデュースは1983年から行われており、菊水丸の音楽における河内音頭改革の一端を担った人物である。純粋な河内音頭のみを追求するのではなく、関西以外の観客へ河内音頭を発信するために、欧米のポピュラー音楽のリズムや感覚を河内音頭のアレンジに採用したと考えられる。

1991年には、CDシングル『カーキン音頭』⁵³⁾を含め10枚のCDが発売されている。これら10作品から、大きく分けて「大衆向け」と「古典」という2つの傾向がうかがえる。過去の新聞詠みをまとめたCD『特選河内家菊水丸 新聞詠み・古典河内音頭ネタ十八番第1集』⁵⁴⁾、『特選河内家菊水丸 新聞詠み・古典河内音頭ネタ十八番第2集』⁵⁵⁾では、一般大衆に親しみやすいものをはじめ、河内音頭のいわゆる古典で構成されている。例えば、親しみやすい題材として「女王美空ひばり」や「フセインとブッシュ」、古典としては「情けの連判状 大石と垣見」などが同時に収録されている。

大衆向けと言えるCD『Happy』⁵⁶⁾は代表作「カーキ

ン音頭」も収録され、レゲエやヒップホップの要素を取り入れた河内音頭を収録している。レゲエはジャマイカ発祥のポピュラー音楽で、「独特のアクセントをもつオフビートと、メッセージ性の強い歌詞に特徴」⁵⁷⁾を持つ。また、ヒップホップは「元来は1970年代にニューヨークのブロンクス地区に居住する黒人、スペイン系の若者の間で始まったグラフィティ・アート、ラップ、ブレイク・ダンスなど、街頭を中心に展開された大衆文化運動の総称」で、「ことばの韻を踏んだ語りを行うラップ」⁵⁸⁾もヒップホップに由来する。菊水丸は本作のことを「正確には河内音頭とは言えない」としながら、「河内音頭がどれほど柔軟」であるか、「河内音頭の可能性を試してみた」⁵⁹⁾と述べ、意欲的な取り組みを見せている。この取り組みは、プロで若年の河内音頭の音頭取りが少なく、自らが改革し担っていかなければならないという責任感と、菊水丸本人の遊び心によるものであると考えられる。また、収録曲の中には沖縄出身の喜納昌吉による「花」がある。喜納とはその後も交流があり、共演も見られる。

古典である「河内十人斬り」は、河内音頭で盛んにとりあげられる題材である。菊水丸もCD『河内家菊水丸の真説・河内十人斬り 前編』⁶⁰⁾『河内家菊水丸の真説・河内十人斬り 中編』⁶¹⁾『河内家菊水丸の真説・河内十人斬り 後編』⁶²⁾として1991年に発表している。古典のみで発表することで河内音頭の音頭取りとしての存在感を示しつつ、従来の扱い方とは違った説を盛り込み⁶³⁾、他との差別化を図り自らの個性を出そうとしている。

また、1992年には「WOMAD ウォーマッド92横浜」に出演している。WOMADとは、1982年に英国のアーティスト、ピーター・ゲイブリエルらの提唱で始まった音楽祭で、「ワールド・オブ・ミュージック・アーツ・アンド・ダンス」が正式名称である。コンサートとワークショップ、フォーラムなどを合わせたフェスティバルで、『英米ロック』主導のポピュラー音楽の世界にワールド・ミュージックのうねりを世界に広めた⁶⁵⁾催しとしても知られ、欧州各国を巡演している。1991年から5年連続で日本において開催され、1991年には坂本龍一、林英哲、上々颱風、りんけんバンド、桜川唯丸らが参加した⁶⁶⁾。

翌1992年には、菊水丸のほか、都はるみやボ・ガンボスらが日本代表として出演している⁶⁷⁾。このWOMADへの菊水丸の出演は、河内音頭が世界的な潮流としてのワールド・ミュージックの中で、大きな意味をもつ存在であったことを示している。河内音頭が日本から世界へと発信する芸能として、認知度やクオリティが認められたことを意味している。この年のフィナーレの

模様が現在、インターネット上の動画共有サイト「YouTube」⁶⁸⁾において見ることができる。着物を着た菊水丸とギターの石田雄一のほか、パキスタンのヌスラット・ファラ・アリ・ハーンや、インドネシアのロマ・イラマ&ソネタ・グループらが同じように歌い、楽器を演奏している。民族固有の歌や踊り、楽器など芸能としてすべてが混じわることなく、それぞれが個性を際立たせながら同じ舞台上に立っている様子が印象的である。

1995年の大きな出来事は、阪神淡路大震災である。関西出身であり、関西を主な活動範囲とする菊水丸には特に大きな影響を与えた。当時の新聞連載にも5週にわたってその様子が記されている。震災の約1ヶ月後、菊水丸が出演するラジオ番組が被災地・神戸からの放送が決まった際、以下のように述べている。「何せ、平和産業であるわれわれ芸能家が訪問すること自体、不謹慎だと感ずるし、何ができるのかと言う気持ちで一杯。出番があるとしたら、それはずっと後のことで7月か8月かの復興盆踊りの時期であろうと...」⁶⁹⁾この時、菊水丸の中に社会が混乱状態のときに何ができるのか、何がしかの行動を起こしたいという思いと、被災地に笑いや芸能を持ち込むことは軽々しいのではないかというジレンマがあったと考えられる。その後、1995年4月以降にも慰問演奏に関する記事があることから、震災以降、継続的に被災地を訪れていたと考えられる。

2.1.3 安定期

1997年以降、活動の拠点が次第に東京を含む全国から関西中心へと変化している。菊水丸も1997年を総括し、「河内音頭取りには理想の1年」⁷⁰⁾と述べている。活動範囲が変わると同時に、新聞読みで用いるネタや対象も全国的なものから関西色の強いものへと変わっている。関西を中心に海外での公演や平和活動を継続しつつ、2000年の沖縄サミット関連のイベントや、NHK海老沢会長へ「怒りの河内音頭」(2005年)など、全国区の話題で存在感を示していた。

これまで菊水丸の活動を整理してきたが、参考資料とした新聞連載が1999年までということもあり、2000年以降の活動については不十分である。CM「カーキン音頭」の余波で舞い込んだ大きなトピックはみられないものの、地元・関西では毎年夏には盆踊りのチラシや看板とともに、河内家菊水丸の名前が多数見うけられる。菊水丸自身「本業は櫓の上」⁷¹⁾と公言しており、河内音頭の音頭取りとして精力的に活動しているのは事実である。河内音頭の知名度を高め、裾野を広げたことが、菊水丸の最も大きな功績と言える。

表1 河内家菊水丸の活動年表

西暦	主 な 活 動	新 聞 詠 み 外 題
1963	2月14日 生誕	
1971	8歳 河内家菊水に入門	
1973	小学校5年生 初櫓	
1978	此花学院高校入学	
1980	吉本興行へ入団 高校3年生 吉本で初舞台 歌のレッスンに通う 「新聞詠み」を知る	
1983	20歳 テレビレギュラー番組（東京・大阪）	
1984	カセット『河内タイフーン』	「レゲエ河内音頭・ボブマーリー物語」 「グリコ事件 終結宣言音頭」「グリコ事件・発端 江崎社長の災難」
1985		「豊田商法最後の日 永野一男物語」
1986	カセットブック『河内音頭・新聞読み』 カセットブック『三浦和義物語』『援護音頭』	「昭和大公・田中角栄物語～序の巻き 少年時代」「ああ国労」 「阪神タイガース伝 - 中埜社長と吉田監督」「山谷～山岡強一物語」
1988	月刊『アサヒグラフ』特集 「ニュースデスク」で「リクルート事件の河内音頭ができるまで」放送	「大リクルート事件 江副浩正半生記」
1989	カセット『大リクルート事件・傑作選』発売 『ニューヨークタイムズ』等から取材	「その後のかい人21面相 前編・後編」
1990		「新日本プロレス音頭」「藤山寛美一代記」
1991	1月 イラクにて「平和の祭典」 テレビCM「カーキン音頭 フリーター一代男」放送（～1992年3月） 7月 CD『カーキン音頭 フリーター一代男』発売 TBSラジオ「河内家菊水丸のスーパーギャング」放送開始（～1992年3月） 12月 CD『オロチョンバ』発売（テレビ番組主題歌） ソ連にて「赤の広場」公演	「リクルート かもめ城の落城音頭」
1992	2月 CD『NEWS』発売禁止 咲くやこの花賞 大衆芸能部門受賞 NHK「まんが日本史」エンディング担当（～1993年8月） 沖縄にて「アジア民族音楽交流祭」出演 9月6日 横浜で「WOMAD」に参加 北方四島色丹島訪問	「タイガースV音頭」「尼崎カラ出張・川柳カラカラ音頭」 「北方四島変換お願い音頭」
1993	CD『オロチョンバ!』発売 高知にて「蔵間&河内家菊水丸がっぷりよつのトークショー」 大阪新聞「菊水丸がゆく」連載開始 スポニチ大阪「菊水丸珍宝堂」連載開始 スポニチ大阪「菊水丸珍宝堂」連載開始 ビール瓶襲撃事件 CD『ホレホレハレハレ』イギリスレコーディング	「竹下ホメ殺し音頭」「皇太子殿下 ご成婚音頭」 「細川越中の守護音頭」「羽田迷惑音頭」「宮沢ウツキ音頭」
1994	「奄美大島お笑い2・26事件」公演 「菊水丸'94ワールドツアー」 「歌フェスタ94」 CD『ヨコヅナいっばん!』発売 「ワンコリア・フェスティバル」(大阪) NHK「紅白歌合戦」出演	「長良守る川音頭」「がんばれ! スフィンクス音頭」 「林葉直子さんお帰りのさい音頭」イタリアにて「マフィア音頭」 韓国板門店にて「南北和平統一音頭」「閑空音頭」 「エイズ音頭94」「大林素子激励音頭」
1995	奄美大島にて「第1回健康祭り」 神戸にて「どんだん歌謡曲」放送 CD『春歌』発売 沖縄にて「吉本キャンブルー花月」照屋林助と共演 「平和のための平壤国際スポーツ文化祭典」 千早赤阪村交通安全大会にて感謝状授与 「阪神淡路大震災チャリティーボクシング」 戦後50年 南太平洋ツアー 10月:通算5000櫓達成 12月「冬眠返上! 菊水丸」放送開始（～1996年3月）	「初夢音頭」「南河内交通安全音頭」「神戸復興音頭」 「平和音頭」「火山灰バイ音頭」 「浪速のジョー・男・辰吉丈一郎」「阪神・淡路未来音頭」 「横山ノック物語」 「ナザロフ応援音頭」 東京にて「エイズ音頭95」 「平田豊に捧げるエイズ音頭」
1996	大阪新聞連載「菊水丸がゆく」終了 MBSラジオ「さてはトコトン菊水丸」放送開始 大阪新聞連載「菊水丸がゆく」再開 奈良に河内音頭の館・別館オープン ニュースジャパン リバー・ウォッチング出演 「アラウンド・ザ・六甲アイランド・フェスティバル96」出演 喜納昌吉と共演 鬼太鼓座と共演 「菊水丸 中南米ツアー'97」 サルサフェスティバル出演 大阪肢体不自由児父母の会	「野茂英雄物語」 大蔵省と国会議事堂前にて怒りの住専ライブ 守口市にて「治水ものがたり」 「さよなら音頭」 「妖艶一代・五月みどり物語」 「横山やすし物語」
1997	著書『総額1億円あっと驚く秘宝展』発売 産業博出演 10月御堂筋パレード 11月 「菊丸・菊水丸・菊満開二人会」 三重県阿児町「ええじゃんかまつり」 「アウトドアズ・ワールド97」	「業界の鬼～金平正紀物語」「ほんまかいなタイガース」 「2008年 大阪オリンピック決定音頭」 「吉本クラブ商品紹介音頭」「八尾中学校創立50周年記念音頭」 「菊丸・流し一代」「ええじゃんか囃子」「新聞読み河内音頭」 「ごめんやす25年の歩み」 CD『法然上人一代記』
1998	「社会を明るくする運動」 「将棋まつり」	「おいしい酒になれ音頭」「東大阪市長やめさせ音頭」 「神戸空港住民投票音頭」「神戸'市営'空港音頭」 「甲子園で会いましょう音頭」青少年ふれあい音頭」 「阪田三吉物語」「野村阪神実現音頭」
1999	南アフリカ・モザンビーク公演 甲子園球場で始球式 「河内家菊水丸 河内音頭生活25周年、プロ活動20周年、平成11年夏櫓出陣式」	平和コンサートにて「世界人権宣言音頭」 「サマランチ応援音頭」「美空ひばり一代記」 「平成女大戦争! サッチーとミッチーの勝負のゆくえ・大予言音頭」 CD『野村阪神優勝音頭』 「大景気回復音頭」
2000	住友信託銀行八尾支店1日支店長 沖縄にて「サミットオープニング御万人カチャーシー フェスティバル」出演	「イチニのサンで行きましょう～吉野川第十堰住民投票参加賛歌」 「沖縄サミット音頭」
2001		「和歌山マリーナシティ ボルトヨーロッパ発 USJ応援音頭」
2002	MBSラジオ「朝はトコトン菊水丸」(～2003年9月)	
2005		NHK海老沢会長へ「怒りの河内音頭」
2007	8888櫓達成	

また河内音頭への接点を、従来の盆踊りだけではなくメディアを通すことで視覚的なものとし、一般大衆全体を対象とすることを可能とした。音楽面では、沖縄民謡の喜納昌吉や創作和太鼓集団・鬼太鼓座など、他ジャンルとの共演を果たし、懐の深さを示した。人々やメディアを効果的に活かしながらワールド・ミュージックの手法を取り入れ、河内音頭の可能性を広げている。これらの芸の幅に大きく影響しているのが、新聞読みである。

3. 河内家菊水丸と新聞読み

「新聞読み」とは、その時々の中略...即興で歌ったのが始まりです」と、述べている⁷²⁾。『広辞苑』には江戸時代に社会の重要事件を瓦版1枚摺りとし、読みながら歩いたものやその人のことを「読売」といい、「のちには歌謡風に綴り、節をつけて読み歩くようになった」⁷³⁾と記されている。また、演歌師である添田知雄は、読売は瓦版がなくなってからの民間報道の有力な機関であったとしている。読売は「くどき」として出来事を伝達していたとし、節をつけて新聞に書かれている出来事を読んで聞かせるという伝達方法があったと述べている⁷⁴⁾。さらに、この読売の時点では大衆が政治に対し批判を持つのはタブーであったとし、事件はただの出来事として報道された、と添田は述べる。そして1887年頃新聞の街頭版であり、批判や思想をもつ「演歌」が現れ始め、演歌はその後、主義主張よりも音楽性を追求していくようになる。この読売は、菊水丸の言う新聞読みに非常に近い。瓦版とともに情報を広めた読売が、新聞読みの原型ではないかと推測される⁷⁵⁾。そして、後に読売に河内音頭の節をつけたものが、菊水丸の言う新聞読み河内音頭ではないだろうか。

河内音頭で現在においても古典として長く読まれ続けているのが、「河内十人斬り」である。これは1893年に南河内の水分村で起きた殺人事件を読んだものである。当時も新聞で大きく報道され、音頭取り岩井梅吉が地元民からの話から音頭として仕立て、評判となったという⁷⁶⁾。この「河内十人斬り」は、新聞読みが長く残ったものといえる。ちなみに菊水丸は戦後になって廃れていた新聞読みを、1984年「グリコ事件 終結宣言音頭」で、菊水丸による新聞読み河内音頭の第1作目として復活させている。

3.1 新聞読みの題材の変遷

新聞読みにおいて大きくそのネタを左右するのが、

何を題材として選ぶかであろう。以下で、菊水丸のネタについて考察する。

「修行期」では、グリコ森永事件や豊田商事事件、リクルート事件など大規模で全国的な社会事件が多く題材として取り扱われている。豊田商事事件では永野一男、他にロッキード事件の田中角栄など、時代を象徴する個人を取り上げて歌っているものがある。最も効果的に面白く伝える方法として、事象そのものを歌うか、個人史として取り扱うか、どちらかを選別している。他に、個人を歌ったものとして「レゲエ河内音頭 ポブ・マーリー物語」がある。ポブ・マーリーが亡くなったのが1981年であり、本作が発表されたのが1984年である。このことから、最新の話題を取り上げたというより、音頭にレゲエを取り入れることと、題材にポブ・マーリーを読み込むという意外性を狙ったと言える。

新聞読みの強さ・利点は、その時々の中略...即興で歌ったのが始まりです」と、述べている⁷²⁾。『広辞苑』には江戸時代に社会の重要事件を瓦版1枚摺りとし、読みながら歩いたものやその人のことを「読売」といい、「のちには歌謡風に綴り、節をつけて読み歩くようになった」⁷³⁾と記されている。また、演歌師である添田知雄は、読売は瓦版がなくなってからの民間報道の有力な機関であったとしている。読売は「くどき」として出来事を伝達していたとし、節をつけて新聞に書かれている出来事を読んで聞かせるという伝達方法があったと述べている⁷⁴⁾。さらに、この読売の時点では大衆が政治に対し批判を持つのはタブーであったとし、事件はただの出来事として報道された、と添田は述べる。そして1887年頃新聞の街頭版であり、批判や思想をもつ「演歌」が現れ始め、演歌はその後、主義主張よりも音楽性を追求していくようになる。この読売は、菊水丸の言う新聞読みに非常に近い。瓦版とともに情報を広めた読売が、新聞読みの原型ではないかと推測される⁷⁵⁾。そして、後に読売に河内音頭の節をつけたものが、菊水丸の言う新聞読み河内音頭ではないだろうか。

また新聞読みを復活させることで、従来の民謡としての側面だけでなく、現実社会と関わることでできるジャーナリズムの側面を提示したことも、河内音頭の場合を広げた要因であろう。もちろん、ジャーナリズムという言葉は適切ではない場合もある。言葉遊びの要素が強く、ウケを狙う点で、中傷や適切でない表現や偏った見方も多々見られる。見方によっては、ワイドショー的な要素も見受けられる。

しかし、一方で「エイズ音頭」のように、ただの風刺とはいえないものもある。この音頭を作るにあたり、エイズ問題について菊水丸は、「新聞読み河内音頭を職とする以上、世の中のさまざまなニュースを題材にネタを作成せねばならず、そこで大きくブチ当たった」⁷⁷⁾と述べている。ここに、菊水丸のベクトルと社会のベクトルの合致を見る。菊水丸から発信される意図や必要な話題性と、社会全体から発信される情報を伝える必要性とが合致した瞬間である。

新聞読みの題材に注目すると、1995年以降、地方のローカルな話題を対象としたネタが増加している。それまでは全国区の社会的な事件を取り扱ったものが多いのに対し、次第に地域に密着したものへと題材が移行している。要因として、地域色に強くこだわった事

象の方が、より一般大衆に共感を得られやすいことが考えられる。1996年には全国に向けて大蔵省と国会議事堂前で怒りの住専ライブを行い、守口市では「治水ものがたり」という音頭を発表している。

1998年の「東大阪市長やめさせ音頭」は東大阪という狭い地域にのみ向けたものだが、1999年の「大景気回復音頭」は全国的な不景気を題材にした音頭である。全国規模の事象を取り上げたものと、ある狭い地域に焦点を当てた音頭の、両者の明確な周期性は発見できない。だが、全国を対象にすることと地域を対象にすることを使い分けられていると考えられる。どちらか一方に偏るのではなく、全国と地域とのバランスをとっていることが伺える。

3.2 河内家菊水丸による新聞詠みの実際

次に、河内家菊水丸の名を全国区とした「カーキン音頭」に焦点を当て、語りの内容を読み解いていく。

3.2.1 「カーキン音頭 ～フリーター一代男～」 青春上京篇

この曲の歌詞は、以下の通りである。

新聞詠み河内音頭

「カーキン音頭 ～フリーター一代男～」青春上京篇⁷⁸⁾

作詞：岩本恭明・柴田俊生

作曲：河内家菊水丸・ジェイムス下地

朝目が覚めたら 昼の2時
駅前そばの ランチも終わる
テレビをつけたら 再放送

フリーター「何やこれ 俺1回見たで」

犯人知ってて もうひと眠り
そろそろ 金も尽きてきた
来週あたりは 働こう

語り...本屋に行ったら店のオッサンが言いよった。

(お囃子)カーカキンキン カーキンキン

こんであんたも happy happy
バイトさがしが しゅ 週2回
フロムAと フロムA to Zがいい

金髪頭で 銭湯行けば
番台ババアが 「ハロー」と笑う
17で 夢見たバンドマン

イカ天ブームは 彼方に去って
残った俺たち どうするの
大人は いつも逃げるだけ
ここに題して フリーター一代男の
青春上京の一篇を
河内音頭にのせまして
菊水丸が唄いましょう
(お囃子)カーカキン カーキンキン
カーカキンキン カーキンキン

そういや 出て来てもう5年
時給ひとつで 店から店へ
ギター欲しくて コンビニエンス
女が欲しくて ショウパブ兄ちゃん
自由が欲しくて フリーター
スタジオ代は いつ稼ぐ

語り...本屋に行ったら店のオバハンが言いよった。

(お囃子)カーカキンキン カーキンキン

こんであんたも happy happy
バイトさがしが しゅ 週2回
フロムAと フロムA to Zがいい
週に2回の チャンスかい
始めたバイトは ゲイバーかい
愉快 かいがい そうかいがい
ギョーカイ野郎が 集まるかいがい
「デビューしないかい」と聞くかいがい
そうは問屋の フリーターかい
体売ったら オシマイかい
(お囃子)カーカキン カーキンキン
カーカキンキン カーキンキン

3月もいたら 飽きてきた
雨が降ったら 休もうか
ボーナスもらえる わけじゃない
今夜は バンドの練習か
おっとその前 美容院
テッペン 黒い毛見えてきた
(お囃子)カーカキンキン カーキンキン

一生 会社で働くやつは

フリーター「給料足しても 家1軒も買われへんやないけ そやけどおいらは 1発で2億やで！」

ドラムのあいつが 酔っ払う

俺も おまえも フリーター
 いつか 夢から醒めるのか
 （お囃子）カーカキン カーキンキン
 カーカキンキン カーキンキン

朝目が覚めたら 昼の2時
 今日はいったい 何曜日
 どうでもいいのさ そんなこと
 大人は いつも笑うけど
 きっと待ってる パラダイス
 俺の背中にや 羽がある
 輝く未来に とんで とんで まわって まわって
 くぐって くぐって しゃぶって しゃぶって
 上から見ても 下から見ても
 表から見ても 裏から見ても
 タテ ヨコ ナナメに
 シュラ シュ シュ シュ！
 （お囃子）カーカキン カーキンキン
 カーカキンキン カーキンキン
 カーカキン カーキンキン
 カーカキンキン カーキンキン

こんであんたも happy happy
 バイトさがして に に 西東
 俺は夢追うフリーター
 いつも陽気に happy happy
 輝く未来に happy happy
 happy happy happy happy

丁度時間となりました
 菊水丸も これにて happy いたします
 （お囃子）カーカキン カーキンキン
 カーカキンキン カーキンキン
 カーカキン カーキンキン
 カーカキンキン カーキンキン

「カーキン音頭～フリーター代男～」は、リクルート「フロムA」のCMとして1991年1月下旬から東京で放送された。都内でCM認知度が98.5%を記録し、4月3日シングルCDとしてポニーキャニオンから発売された⁷⁹⁾。

ビデオ『ザッツ・河内音頭』がCM制作会社の目に留まり、CMソング起用となったという。このビデオは大阪のビデオ制作会社が、大阪の花博でのイベント「大阪夏祭り ザ・盆踊り」の模様を無断録画したもので、菊水丸のほか江州音頭の桜川唯丸など多くの音頭取り

が出演している。当時ワールド・ミュージックのCDを多く手掛けていた東京のレコード店WAVEが東京で試験的に販売し、後に全国展開に至ったとしている。その背景として『朝日新聞』では、河内音頭がワールド・ミュージック・ブームの中で、日本のダンスミュージックとして再発見したことに注目している⁸⁰⁾。また、菊水丸は当時は振り返って、「リクルート事件」で新聞詠みが認知されたことを理由として挙げている⁸¹⁾。新聞詠み自体の認知度の高まりだけでなく、民謡でありながら、エレキギターなどを使用する斬新さや、社会について語る新聞詠みというスタイルがメディアの注目と興味をひいたと考えられる。

菊水丸の名を一躍有名にした「カーキン音頭」であるが、意外にも菊水丸の作詞ではない。作詞は岩本恭明（博報堂）と柴田俊生（CM制作会社）、作曲は河内家菊水丸とジェームス下地（CM制作会社）が担当している。菊水丸による作詞ではないが、「カーキン音頭」は菊水丸自身の知名度を高め、菊水丸の代表作ともいえることから、本論で取り上げた。まず、歌詞に見られる特徴を整理する。さらにそのうえで、当時ブームとなった「いかすバンド天国」に代表される音楽シーン、CMソングとしての「カーキン音頭」、そして「カーキン音頭」の主役であるフリーター現象、という3つに着眼して考察する。

（1）テキストについて

「カーキン音頭」に登場する「フリーター代男」は、様々なアルバイトを転々としながら生計を立てている。バンドマンに憧れ、イカ天ブームに乗っていた名残の金髪をしている。イカ天とは、1989年に開始したTBS系テレビ番組『平成名物TV』の人気コーナー「三宅裕司のいかすバンド天国」の略語である。このコーナーでは「素人バンドが勝ち抜き戦で争い、これを足がかりにプロ活動を始めるバンド」⁸²⁾もあった。この番組で5週勝ち抜き、プロデビューしたバンドには沖縄出身のBEGINがいる。空前のバンドブームを背景とし、1990年には歩行者天国で演奏しているロックバンドをさす「ホコ天」とともに新語流行語となった⁸³⁾。『現代用語の基礎知識』ではこの流行を支えた若者感覚として、「努力よりチャンス、目立つことがベスト」という風潮を挙げている。

また、歌詞に登場する男性は高校卒業と同時に地方から上京した、と仮定すると現在23歳である。成人しているが、自分が大人であるという自覚はない。彼は1986年、バブル経済の始まりに上京したと考えられる。当初はバンドマンという明確な夢があったことから、フリーターと名づけられた、「学校を卒業してもまじめ

に夢に向かってチャレンジしている若者」⁸⁴⁾であったかもしれない。男性の考え方として、「一生会社で働くやつは『給料足しても家一軒も買われへん』とし、『そやけどおいらは一発で二億』という台詞から、ギャンブルなどで一攫千金を夢見ており、地道に働くサラリーマンを見下していることが見受けられる。まじめに働いても『家一軒も買われへん』とし、定職について働くことに馬鹿馬鹿しさを感じているといえる。一般的に「バブル期には若者の転職や失業への抵抗感が薄れ」⁸⁵⁾、彼は就職することよりも“自由”を選び、フリーターになったと考えられる。「自由が欲しくてフリーター」が象徴的であり、昼まで寝て、資金が尽きれば働くという“自由”な生活を繰り返している様子が描かれている。転々とアルバイトをやり変えるさまから、労働内容に拘りはなく、時給・ギター・女性へと働く目的に左右されている。「夢を追う」と言いながらも、夢だけを見て自己実現することもできない様子が見受けられる。「いつか」定職につく日が来るのだろうか、と、若干の後ろめたさもあり、このままでいいのかと思案しているようにも読み取れる。しかし、最終的には「胸はフリーター」として、フリーターである自分に自信を持ち、「輝く未来」を夢見ているところに帰着する。また、この音頭全体を、「どうでもいい」「パラダイス」「happy」など楽天的な空気が支配していることも特徴的である。

度々出てくる「カーキン(火・金)」は、アルバイト情報誌『フロムA』の発売曜日である「火(曜日)」「金(曜日)」を表している。商業的な意味をはっきりと持ってはいるが、あっけらかんとした軽さを持った語感で、「カーキン音頭」の楽曲の雰囲気盛り立てているように感じられる。

(2) 1990年代当時の音楽シーンにおける「カーキン音頭」

1990年代前半、若者を中心に日本では空前のバンドブームにあった。日本の中心は東京であり、プロデビューするためにはまず東京へ進出する、という認識がもたれていた時代である。「カーキン音頭」の登場人物も地方から東京へ、という移動体験をもつことが読み取れる。そして、この音頭を読んだ菊水丸自身も、地元関西から東京へと活動範囲を広げていた。

ここでは1980年代後半以降、ワールド・ミュージックに注目が集まる中で、「カーキン音頭」がどのように認識されていたのかを考察する。

「カーキン音頭」は、レゲエ調にアレンジされた河内音頭である。ワールド・ミュージック・ブーム以前は、関西以外の日本人々にとって、河内音頭を耳にする機会はほとんどなかった。「カーキン音頭」は、日

本の民謡である河内音頭を母体とした音楽でありながら、郷愁を感じる素材ではなく、むしろ新しい音楽として受け取られたと思われる。カリブ海に浮かぶ島、ジャマイカで生まれたレゲエと、その音楽要素を取り入れた「カーキン音頭」を音頭取りの菊水丸が歌うことによって、当時隆盛を極めていたワールド・ミュージックの1つとして受け入れられた。沖縄の音楽が日本の「内なる外部」⁸⁶⁾の音楽として認識されたように、河内音頭も大部分の人々にとって、日本に存在する未知の音楽として注目されたのであろう。「カーキン音頭」では、河内音頭の要素はやや薄まっているが、レゲエ&河内音頭という新しいジャンルとして捉えられたと言える⁸⁷⁾。

(3) CMソングとしての「カーキン音頭」

「カーキン音頭」は、リクルートのアルバイト情報誌『フロムA』の15秒間のCMソングとして出発した。当初、CD販売する予定はなく、認知度の高まりを受けてCD化したという経緯を持つ。初めからCD化を意図していたのではなく、当初の狙いは『フロムA』の認知度を高め、購買を増やすという宣伝目的であった。囃子は通常の河内音頭で用いられる「エンヤコラセードッコイセ」ではなく、「カーカキンキン カーキンキン」と、言い換えられている。これは「火 火 金 金 火 金 金」を表す。「バイト探しが しゅ 週 2回」と連動しており、『フロムA』の発売曜日である「火」「金」を浸透させるために作られた歌詞である。このように、商品の宣伝を意図して作られた楽曲が、ある人物が全国区となるきっかけに結びつくというのは、当時では特異なスタイルであった。菊水丸には河内音頭という基盤があったからこそ、その後の活動に結び付けることができたと考えられる。このCM映像は現在、You Tubeで確認することができる。映像ではタコ型火星人とイカ型金星人が登場し、「カーキン音頭」に合わせて踊っている。

CGのタコとイカ、そしてレゲエのリズムにのせた「カーキン音頭」は、当時相当なインパクトを与えたと推測される。CDの売上が2.9万枚を越え⁸⁸⁾、CMも継続放映されたことから、その反響の大きさが伺える。

また、この「カーキン音頭」の歌詞の中には、イカ天に代表される、その時代を象徴する若者文化が単語として詰め込まれている。最初からフリーター層である若者に焦点を絞り、彼らの文化や思想を歌いこむことによって、受け入れられることを想定した構成である。

1990年代初期と2008年の現在とでは、『フロムA』の宣伝方法にも違いが見られる。当時は、雑誌『フロムA』の宣伝方法といえばCMに拠るところが大きく、形

態はそれほど多様ではなかった。CMは制作会社や企業が主体となって製作し、CMを放送することでメッセージを人々に伝える。それが反響となって雑誌の売上や、間接的にはCDの売上につながっていった。

現在では宣伝媒体がCMのほか、パソコンや携帯電話でのインターネット上に広がっている。宣伝媒体というより『フロムA』自体が、雑誌『From A』、インターネット『from A navi』、携帯電話で閲覧可能なウェブサイト『ケータイ版 From A navi』など、多様に展開している。また、短期中心の派遣会社である『リクルート フロムエーカスティング』があり、その中でも「販売・フード専門」というように細分化されている。利用者がより早く希望する職種を見つけられるよう、迅速化していることが見受けられる。企業側も、利用者を従来のように不特定多数の一部を対象にするのではなく、ある層に焦点を定めて提示することが可能となった。このように、多様化・細分化の流れの中では、当時のような広く一般大衆に認知される現象は起きにくいと考える。

（４）「カーキン音頭」にみるフリーター像とその変遷

「カーキン音頭」が放送されたのは、1991年の1月から翌1992年の3月までである。この時代はちょうどバブル崩壊の直前にあたる。「土地や株の相場が揺れ動くようになった1990年、うたかたのように“泡”は消えるのではないかと多くの庶民が感じ始め、『バブル経済』の文字は頻度を増し⁸⁹⁾、「バブル経済」が流行語になったのは1990年のことである。人々の危機感によって流行語となったバブル経済は、その後、株価の急落によって崩壊する。

フリーターとは、「フリー・アルバイトを略した英独混在和製用語」⁹⁰⁾で、「もともとは、1980年代後半にアルバイト情報誌で『学校を卒業してもまじめに夢に向かってチャレンジしている若者』を応援する意味で使われた造語」⁹¹⁾であった。厚生労働省では年代によって定義が異なるが、概ねフリーターを（１）現在就業している者については勤め先における呼称が「アルバイト」または「パート」である雇用者、（２）現在無業の者については家事も通学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事を希望する者、と定義している。そして1982年の調査において、その数は50万人、1992年には101万人と推計されている⁹²⁾。

「カーキン音頭」の反響の大きさから、フリーター層の支持を受けたと考えられる。しかし、フリーターと言っても、労働問題として捉えた時、現在のフリーター像とは多少意味合いが異なると考えられる。現在、社会問題となっているフリーターは、正社員ではない

アルバイト生活者という定義は変わらないが、「正社員としての拘束を嫌うといった意識変化とともに、長く続く就職難のなかで、満足できる就職ができなかった」⁹³⁾というやむをえない事情を持つ。現在も転職への抵抗感は低くなっているが、それはいわゆる就職氷河期（1992～2004年頃）に自分の希望する職に就けなかったことが要因として考えられる。同じフリーターであっても、「カーキン音頭」の受け入れられた、自由を求めて敢えて働くことを選ばなかった者と、バブル崩壊の後に就職氷河期を迎え、納得のいく働き口を見つけられなかった者とは異なる。

バブルの好景気の中で、多くのフリーターに受け入れられた「カーキン音頭」であるが、現在同じように定職につかない若者層の支持を受けることは難しいと考えられる。その理由として、文化・風潮の変化とともに、社会の担い手の変化が挙げられる。現在、バブル崩壊後の「失われた10年」に大人になった若者である「ロスト・ジェネレーション」以降の世代が、中心となる労働層の大半を占めている。新語アナリストの亀井肇は「ロスト・ジェネレーション」を「大学卒業間近の時期に戦後最長の不況期にあたって、思う通りの就職ができず、フリーターのままで過ごさなければならなかった者たち」とし、「かつての高度経済成長を支えた年功序列や終身雇用が崩壊し、成果主義が強まる最前線で『さまよい』ながら必死に生きていかなければならない世代」⁹⁴⁾と、定義している。

具体的な数値でみると、1992年において101万人であったフリーターは、2000年では193万人と推計されており、増加傾向がうかがえる⁹⁵⁾。またフリーターの定義に派遣・契約社員や、失業者のうちアルバイト・パートとして就業している者を含んだ内閣府の定義では、1992年で190万人、2000年で384万人と、同様に増加傾向にある。このデータの差は正社員として働きたいと望みながらも、フリーターという立場を選択せざるを得ない人口の多さを表している。

また、非正社員は増加傾向に、正社員はそれ反して減少傾向にある⁹⁶⁾。加えて、現在の就業形態がパート・アルバイトである者のうち、正社員としての就業形態を望む者が男女ともに過半数を超える⁹⁷⁾。これらのことから、門倉貴史は「本人の希望というよりは、企業側のやむを得ない事情で非正社員になってしまった若者がかなりの数に上る」⁹⁸⁾としている。非正社員から正社員への登用が困難なことや、非正社員を取り巻く現在の厳しい環境から、「カーキン音頭」に見られる労働に対する安易な考えと軽視に共感する者は少ないだろう。

なお、「カーキン音頭 ～フリーター一代男～」青春

上京篇の続編として、中年望郷篇がその数ヶ月後に放送され、CDシングルのB面に収められている⁹⁹⁾。また、CD『Happy』¹⁰⁰⁾には青春上京篇と中年望郷篇が、合わせて収録されている。菊水丸は「カーキン音頭」のヒットについて、「CM契約は延長を繰り返し、平成3年1月下旬から翌年の3月下旬まで続き、夏だけの男から、1年中働く人に変身した」¹⁰¹⁾と環境の変化について述べている。これは、関西を活動拠点としていた菊水丸が東京でのCMで人気を博し、その影響から東京のみならず、関西を含めて仕事が増加したことを示している。『朝日新聞』はこの現象について、「東京での人気、ブーメランのように大阪に返ってきた」と分析している¹⁰¹⁾。

東京で全国的な知名度を得て活躍の幅を広げたのは菊水丸だけでなく、他にタレントの間寛平、1991年の流行語にもなった、「...じゃあ～りませんか」のチャーリー浜などが挙げられる¹⁰²⁾。東京では異質で新鮮なものとして人気となり、東京で認められたという実績とラベルが、地元関西で注目されるきっかけを生んだと考えられる。ブームというのは一時的なもので、現在、菊水丸やチャーリー浜は関西を拠点として活動している。また、この『朝日新聞』のインタビューで、当時の吉本興業社長・中邨秀雄は、「菊水丸は菊水丸で人気を楽しんでいる。『いつまでも続くもんじゃないし、こんな年があってもええやろ』」¹⁰³⁾と述べており、東京ですっと活動することを目指していたわけではない。一過性のものとして冷静な目を持ちながら、「大当たり」の流れに身を任せ、現在は然るべきところに落ち着いたと考えられる。

菊水丸独自のスタイルである新聞詠み河内音頭という古い器に、フリーターといった新しい題材をのせて、世間に発表した。この新鮮さが、「カーキン音頭」が大ヒットした最も大きな原因であり、菊水丸のその後の活動を大きく広げることとなった。

4. 河内家菊水丸における新聞詠みの位置づけ

「カーキン音頭」は既に制作された作品を仕事として請負い、菊水丸が歌ったものである。しかし、その背景には、ワールド・ミュージック・ブームの高まりの中で河内音頭が注目され、菊水丸が復活させた新聞詠みが新たなジャンルとして認知されてきたことがある。結果的に、音楽としての河内音頭の柔軟さと、マスメディアを通したエンターテインメント性の可能性を示すことに成功した。

菊水丸の活動において、新聞詠みは非常に大きな比重を占めている。新聞詠みの影響を含めると、それが活動の中心に位置しているといえる。ここで言う影響

とは、新聞詠みという活動スタイルを実践することによって、活動範囲が変化したことを意味する。CM出演や新聞連載などに見られる活動範囲の広がり、河内音頭における音頭取りの中でも、菊水丸だけに見られる際立った活動である。加えて、それまでの河内音頭に対する人々の意識の変革を引き起こし、河内音頭の新たな可能性を提示した。河内音頭の観客が増員した背景には、菊水丸の活動が新たな聴衆層の掘り起こしに一役買ったことを示している。菊水丸は、新聞詠みを復活させることによって、「新聞詠み河内音頭」を担っていく自分の立場を確立した。ほかの音頭取りと活動スタイルの違いを明確にし、差別化することで、個性を際立たせることを可能にしたといえる。新聞詠みだけに偏るのではなく、古典を基礎とした上で新聞詠みを導入し、河内音頭取りとしての芸の幅を広げたのである。

また、菊水丸の新聞詠み全てに共通しているのが、一般市民の立場に立って、詠んでいるという点である。これが大衆芸能としての河内音頭と、新聞詠みとの重要な接点であると考えられる。古典の外題における河内音頭は浪曲の影響を受け、任侠などを扱ったものが大半であり、大衆向けとするには一部に特化しすぎている。また、古くは江戸時代の瓦版まで遡る新聞は、現在では報道機関として普及し、新聞だけでなく雑誌やテレビ、ラジオなど様々なメディアに亘っている。マスメディアが多様化と「真実性と客観性、また論評機能には批判性という規範性」¹⁰⁴⁾を本義とするジャーナリズムの間には、大きな齟齬が見られる。

一般的に、事実の追求において曖昧さや感情を挟む余地はない。しかし、一般市民の感情形成においては、「硬い」ニュースよりも「柔ら」かくて感情論的な視点を併せ持った伝え方が有効的に伝わる場合がある。その隙間を埋めるように存在するのが、菊水丸の新聞詠みではないだろうか。社会的な事件や事件とは行かないまでも、注目を集める事象をネタとして扱うことで、潜在的な河内音頭の観客層を増やしたのである。新聞詠みは、ネタに用いる題材によって、ある特定の世代を想定することも、逆に世代を超えた人々の関心をひくことも可能である。

新聞詠みを中心とした菊水丸の活躍は、テレビやラジオなどの放送メディアのほか、出版メディア、録音メディアの全てによって支えられている。「続きは.....」と観客の興味を引っ張り、メディア間の往還を意図的に作り出すことで、櫓の上だけではないスタイルを確立している。マスメディアという媒体を巧みに活かしながら、新聞詠みによって社会的な事象を扱い、市民と同じ目線で親しみやすさを提示するのが、菊水丸の

やり方であり、成功の要因だといえる。観客個人に語りかける新聞読みという手法を取り、結果的に一般大衆の支持を得るに至ったのである。

なお、本稿は田中友美の平成19度高知大学教育学部・卒業論文「河内音頭における伝播プロセスと展開 河内家菊水丸の活動を通して」をもとに、高橋が加筆修正したものである。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、森田美佐氏には労働問題に関する文献・資料の紹介など、細部にわたって多くの御助言、御教示をいただいた。ここに記して、感謝申し上げたい。

註

- 1) 2001「河内音頭」仲井幸二郎・丸山忍・三隅治雄編『日本民謡辞典』東京堂出版、pp.115-116
- 2) 1975「口説」田辺尚雄編『邦楽用語辞典』東京堂出版、pp.50-51
- 3) 村井市郎 1991「なにわの音頭博士はかく語りき」全関東河内音頭振興隊編『日本一あぶない音楽』JICC出版局、p.73
- 4) 中村とうよう 1999「河内音頭と『十人斬』」『ニッポンに歌が流れる』ミュージック・マガジン社、p.111
- 5) 「語り物」『デジタル大辞泉』小学館
- 6) 前掲4) pp.110-111参照
- 7) 河内家菊水丸 2000『河内謎とき散歩』廣済堂出版、pp.150-151
- 8) 松林茂 1991「百派千人、音頭取り評判期」『日本一あぶない音楽』JICC出版局、pp.200-201
- 9) 村井市郎 2002「第9回学術文化講演会 大阪の文化と『河内音頭』河内の音頭 いまむかし」『大阪経済法科大学総合科学研究所年報』2巻、大阪経済法科大学研究所、pp.102-105
- 10) 前掲3) pp.71-83
- 11) 鉄砲光三郎 EP『民謡鉄砲節』（テイチク、NS497、1961）
- 12) 朝倉喬司 1988「河内音頭（大阪）」『国文学解釈と鑑賞』53巻、至文堂、pp.105-107
- 13) 前掲8) pp.200-202
- 14) 前掲7) p.173
- 15) 1991「河内音頭取り名鑑」全関東河内音頭振興隊編『日本一あぶない音楽』JICC出版局、pp.214-219
- 16) 前掲6) p.109
- 17) 三音会HP
<http://www5b.biglobe.ne.jp/~rengokai/81845092/>
- 18) 前掲15) pp.214-219
- 19) 鳴門会HP
<http://www.geocities.jp/supasiomiroku/>
- 20) 「浪花節／難波節」『デジタル大辞泉』小学館
- 21) 前掲8) pp.202-203
- 22) 河内家菊水丸 1991「菊水丸レコード・コレクション」全関東河

- 内音頭振興隊編『日本一あぶない音楽』JICC出版局、pp.193-194
- 23) 前掲22) p.193
- 24) 2007.2.19「見てよ！聴いてよ！浪花節／11 忘れえぬ人」『毎日新聞』
- 25) 安斎竹夫 1975『浪曲辞典』日本情報センター、pp.54-55、p.223
- 26) 前掲22)
- 27) 前掲25) pp.61-63
- 28) イヤコラセ東京HP
http://www.geocities.jp/iyakorase/fm_aboutus.htm
- 29) 朝倉喬司 1978「大阪の闇をゆさぶる河内音頭のリズム」『ニュー・ミュージック・マガジン』10巻11号、pp.30-41
- 30) 1992.7.28「盆踊り様変わり ダンス音楽に気ままなステップで若者に大人気」『朝日新聞』
- 31) 藤岡和賀夫 2000『あっ、プロデューサー』求龍堂、pp.76-77
- 32) 前掲31) pp.179-180
- 33) 無気力、無関心、無責任の三無に加えて、無感動、無教養、無学力、無気力の五無を足す。前掲31) p.182参照。
- 34) 前掲31) p.183
- 35) 森彰英 1995『イベントプロデューサー列伝』日経BPセンター、pp.245-246
- 36) 前掲35) pp.252-253
- 37) 河内家菊水丸 2001『唄う爆弾30連発！河内家菊水丸の新聞読み河内音頭』集英社、p.37
- 38) 1996.1.22「横山やすしさん死去 上方漫才を代表・破滅型で事件も」『朝日新聞』
- 39) 前掲37) pp.37-38
- 40) 前掲37) p.43
- 41) 前掲37) p.98
- 42) 前掲37) pp.98-99
- 43) 平岡正明 1985「Hey龍重、ジャズも音頭もお前のものだ」『ミュージック・マガジン』17巻4号、pp.56-61
- 44) 藤田正 1985「河内家菊水丸 頭角を現す音頭界のニュー・ヒーロー」『ミュージック・マガジン』17巻11号、pp.48-51
- 45) 平岡正明 1984『ミュージック・マガジン』16巻2号
- 46) 前掲37) p.96
- 47) 前掲12)
- 48) カセット『大リクルート事件・傑作集』（エスニック、K26K-2601）
- 49) 佐原一哉 1996「民謡とポップ・ミュージックのはざまにて バグダッド、沖縄、大阪」『思想の科学』7次141巻、p.23
- 50) 竹中功 1991「河内家菊水丸バグダッド訪問記」全関東河内音頭振興隊編『日本一あぶない音楽』JICC出版局、pp.148-149
- 51) 前掲50) pp.148-151
- 52) 河内家菊水丸 CD『パッドニュース アントニオ猪木一代記』（パッドニュース、BNCL-1003/4、2002）
- 53) 河内家菊水丸 CDシングル『カーキン音頭 フリーター一代男』（ボニーキャニオン、PCDY-00084、1991）
- 54) 河内家菊水丸 CD『特選河内家菊水丸 新聞読み・古典河内音頭

- ネタ十八番第1集』(アポロン、APCA-29、1991)
- 55) 河内家菊水丸 CD『特選河内家菊水丸 新聞詠み・古典河内音頭
ネタ十八番第2集』(アポロン、APCA-36、1991)
- 56) 河内家菊水丸 CD『Happy』(ボニーキャニオン、PCCY-00261、1991)
- 57) 「レゲエ」『デジタル大辞泉』小学館
- 58) 「ヒップホップ」『日本大百科全書』講談社
- 59) 前掲22) p.198
- 60) CD『河内家菊水丸の真説・河内十人斬り 前編』(アポロン、
APCA-43、1991)
- 61) CD『河内家菊水丸の真説・河内十人斬り 中編』(アポロン、
APCA-44、1991)
- 62) CD『河内家菊水丸の真説・河内十人斬り 後編』(アポロン、
APCA-45、1991)
- 63) 前掲7) pp.170-171
- 64) 河内家菊水丸 2000『菊水丸のスクラップ帖』たる出版、p.87
- 65) 1991.8.27『『地球規模』でつどう音楽家 30日からウォーマッド91
横浜』『朝日新聞』
- 66) 1991.4.23『横浜に世界から160人 日本で初の『WOMAD』国際音
楽祭』『朝日新聞』参照
- 67) 『ミュージック・マガジン』1992年12月号 参照
- 68) You Tube <http://jp.youtube.com/>
- 69) 前掲64) pp.75-77、p.79 参照
- 70) 前掲64) p.209
- 71) 前掲16) p.151
- 72) 前掲7) p.15
- 73) 「読売」『広辞苑』岩波書店
- 74) 添田知道 1963『演歌の明治大正史』岩波新書、pp.1-2
- 75) 倉田喜弘 2002『近代歌謡の軌跡』山川出版社 参照
- 76) 前掲4) pp.112-113
- 77) 前掲37) pp.118-123
- 78) 歌詞は、前掲37) pp.101-107より掲載した。
- 79) 前掲37) pp.107-108
- 80) 1991.1.14『河内音頭は日本のダンスミュージック！？ビデオが人
気呼ぶ』『朝日新聞』
- 81) 前掲37) p.99
- 82) 「イカ天」『現代用語の基礎知識』自由国民社
- 83) 「ホコ天」『imidas』集英社
- 84) 「フリーター／ニート」『imidas』集英社
- 85) 「フリーター[青少年と社会]」『imidas』集英社
- 86) 小川博司 1995『日本のポピュラー音楽に現れた沖縄』『オリエン
ト幻想の中の沖縄』海風社、p.161
- 87) 臣永正廣 1991『河内音頭はワールドミュージック』『AERA』4
巻8号、朝日新聞社、p.72
- 88) 「カーキン音頭」1997『オリコンチャート・ブック／アーティスト
編 全シングル作品』オリコン、p.89
- 89) 「バブル経済」『現代用語の基礎知識』自由国民社
- 90) 前掲85)

- 91) 前掲84)
- 92) 厚生省若年者キャリア支援研究会報告書 参照。
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/09/h0919-5g9.html>
ちなみに厚生省による「フリーター」の定義は、1982年から1997
年は年齢が15～34歳で、(1)現在就業している者については勤め
先における呼称が「アルバイト」または「パート」である雇用者
で、男性については就業継続年数が1～5年未満の者、女性は未
婚で仕事を主にしている者、(2)現在無業の者については、家事
も通学もしておらず、「アルバイト・パート」の仕事を希望する者。
2000年は年齢が15～34歳の卒業生で、勤め先における呼称が「パ
ート・アルバイト」である者(女性について無配偶の者に限定)。
2002年は年齢15～34歳層、卒業生に限定することで在学者を除く
点を明確化し、女性については未婚の者とし、さらに(1)現在就
学している者については勤め先における呼称が「アルバイト」又
は「パート」である雇用者で、(2)現在無業の者については家事
も通学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事を希望する者、
とされている。
- 93) 「フリーター[労働問題]」『imidas』集英社
- 94) 「ロストジェネレーション」『亀井肇の新語探検』
- 95) 厚生省若年者キャリア支援研究会報告書より
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/09/h0919-5g9.html>
- 96) 総務省「労働力調査」より
- 97) 内閣府 2003『若年層の意識調査』より
- 98) 門倉貴史 2006『ワーキングプア』宝島社、p.141
- 99) 前掲53)
- 100) 前掲56)
- 101) 前掲37) p.108
- 102) 1992.1.7『笑ビジネス(KANSAI都市の変相図:4)兵庫』『朝日
新聞』朝刊
- 103) 1991.8.8『東京当たりに力こぶ 大阪の吉本興業、タレント売り
込み図る』『朝日新聞』夕刊、p.13
- 104) 内川芳美『ジャーナリズム』『日本大百科全書』講談社

参考文献

- 朝倉喬司 1988『河内音頭(大阪)』『国文学解釈と鑑賞』53巻、至文
堂、pp.105-107
- 河内家菊水丸 2000『河内謎とき散歩』廣済堂出版
- 河内家菊水丸 1991『菊水丸レコード・コレクション』全関東河内音
頭振興隊編『日本一あぶない音楽』JICC出版局、pp.188-199
- 河内家菊水丸 2001『唄う爆弾30連発！河内家菊水丸の新聞詠み河内
音頭』集英社
- 村井市朗 1985『連載 日本の芸能100年／席の芸と櫓の芸』『ミュー
ジック・マガジン』17巻3号-11号

参考音源

- 河内家菊水丸、CD『Happy』(ボニーキャニオン、PCCY-00261、1991)